



現代世界理解を目的とする世界史の構想：
「文明論」による授業構成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2008-05-21 キーワード: 作成者: 斎藤, 修, 安藤, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005308

現代世界理解を目的とする世界史の構想 — 「文明論」による授業構成 —

斎藤 修* 安藤 豊**

*北海道滝川西高等学校

**北海道教育大学旭川校社会科教育教室歴史教育研究室

はじめに

国際社会の進展の中で国際理解という視点が、臨時教育審議会（以下「臨教審」）、中央教育審議会（以下「中教審」）と進み、平成11年度版学習指導要領（以下「新学習指導要領」）には具体化されてきた。中教審答申に従うならば、新学習指導要領中の地理歴史科に含まれる「国際理解」という考え方は、「異文化理解」である¹⁾といえる。

E.H.カーやブローデル等の言葉を借りるなら、本来、歴史とは、現在・現代理解²⁾であり、そのことが「国際理解」「異文化理解」につながると考えられている。しかし、新学習指導要領による「世界史B」の内容構成をみると、「国際理解」が「異文化理解」へ結びついているとは思えない。それは、「地域世界」という枠組みを導入したことによる。

従来は、「文化圏」という、世界を3つに分ける大きな枠組みを使用していたが、そのねらいが達成されたこと、大きな枠組みでは「文化圏相互の交流の歴史」が描けないという理由から「地域世界」という「場」の概念を採用した³⁾と説明している。しかし、導入の真意は、「学習内容が増大した」⁴⁾ためであり、そのような概念導入は、問題がある、と私は考えた。

近年、ハンチントンに代表される「文明」とい

う枠組みによって、現在・現代の社会を分析する方法⁵⁾が注目されている。「文明」単位による枠組み概念は、冷戦後に頻発するようになった民族対立等、現在・現代に起こる様々な出来事の原因をわかりやすく説明してくれる。

歴史教育の目的が、現在・現代を理解することであるならば、「地域世界」という枠組みではなく、「文明」という枠組みを使うのが最良であると考え、それを使ってどう教えるのか、ということを試みてみた。

1 新しい教育内容のフレームとしての

文明論の考察

(1) 「比較文明論」

「文明」という枠組みに着目した比較文明学という学問がある。それは、ヨーロッパ中心史観への批判、一元的な発展段階への批判から始まったとされる。ロシアのダニレフスキーが先駆的な役割を果たした経緯はあるが、比較文明学という研究領域が形成・確立されたのは、シュペングラーであった⁶⁾。彼は「世界史が多元的であり」⁷⁾いくつもの文明があると主張した。その研究成果が、ソローキン、クローバー、トインビー、バグビー等に影響していった。その後、研究の中心がアメリカに移り、アメリカの研究者を中心に研究されていった。その中にクウィグリー、メルコ、

そしてハンチントンがいる。

わが国での比較文明学研究の歴史は、山本新と梅棹忠夫から始まり、伊藤俊太郎へと発展した。

(2) 「比較文明論」における文明の定義

上述した「比較文明論」を展開した研究者たちの考える「文明」という枠組みの定義は次のようなものである。

①ダニレフスキー

ダニレフスキーは、『ロシアとヨーロッパ』の中では、文明を概念規定していない。彼はそれを「文化・歴史類型」と呼んでいる。そのことについても、明確に定義づけているわけでもない。しかし、我が国の比較文明学者である堤彪氏が、ダニレフスキーの考える類型ないし、文明について、次のように紹介している⁸¹。

通常いくつもの民族や国家を内含しながら、それぞれ伝統的な世界史三分法による古代・中世・近代に相当する民族誌的状态・国家状態・文明状態を経て、それぞれの歴史的使命を全うするのである。しかし、同一の文明の内部で起こる歴史事象だけが意味連関をもち、それぞれの発展段階に配分されるのであって、全人類の運命をなんらかの普遍的な時代区分に割り振ることができるような事件は、一つもない。

そして、そうした文化・歴史類型（いわゆる文明）の発展法則を5つ挙げているという。それを堤氏は次のように要約している⁸²。

- (1) 特有の言語ないし近縁言語群をもつ民族ないし民族群は、ある段階に達していれば、概して独自の文化類型を形成する。
- (2) ある類型固有の文明が生まれて発展しうるためには、この類型に属する諸民族が政治的に独立していなければならない。
- (3) ある類型の文明の土台は他の類型の諸民族には伝達されず、各類型は先行ないし同時

代の異質の文明から多少は影響を受けながら、そうした土台を独力で造り上げる。

- (4) 各類型固有の文明は、構成諸民族が多様で政治的に独立しているながら政治的な連合体制を形づくっている場合にだけ、充実して豊かになる。
- (5) 各類型の成長期の長さは不定だが、満開・結実期（文明期）は比較的短く、いっきよに生命力を枯渇させる。

以上のダニレフスキーの議論から次のようなことがわかる。すなわち彼の考える文明は、「文化・歴史類型」の結実期としての意味でしか位置づけられていない。これは、約50年後のシュペングラー以降の比較文明学者たちが考える文明概念とは多少違うものである。しかし、世界史の発展が一元的な発展段階によって成り立っているわけではないとしている点、つまりそれぞれ伝統的な変動があるという点、ヨーロッパ中心に歴史が進んでいるのではないとしている点、を考えると後述の比較文明学者たちの先駆者的役割を果たしているもの⁸³といえる。

②シュペングラー

シュペングラーは、『西洋の没落』の中で、文明を、「生まれ、育ち、そして衰頹を迎えた文化の、運命的な“終末”状態」⁸⁴と述べたとされる。そして、その文明は、それぞれ固有のものであり、本質的に通じあわないもの、と考えていた。これを文明の伝播不可能性⁸⁵と表現しているという。要するに個々の文明を、孤立的で自足的であり、自己完結的で閉ざされたもの、とみなしていたとされる。

シュペングラーは、文明を文化の一形態と定義づけ、文化を文明よりも優位におこうとする考え方をもっていた⁸⁶、とされる。このことは、ドイツ人である彼のドイツ的な概念規定である「文明は機械、技術、物質的要素にかかわるものであり、文化は価値観や理想、高度に知的・芸術的・道徳的な社会の質にかかわるもの」⁸⁷という考え

が反映されている点であるとされる。しかし、例えそうであっても、文明を世界史研究するための基本単位としてとらえていることにはちがいない。

③ソローキン

ソローキンは、『現代社会学および関連諸科学における一時的流行と弱点』（“*Fads and Foibles in Modern Sociology and Related Sciences*”）の中で文明について次のように考えている、と A. クローバーはいつている。¹⁵⁾

彼はいかなる文明も「一つの統一された文化的システムでは」なくて、「一つの巨大な文化的なごみの山である」と繰り返している。文明は「一つのシステムとして、生まれるとか成長するとか死ぬことはありえない。」

ソローキンは、文明の存在を認めながらも、上述のように単なる「文化的なごみの山」つまり集積物としてみている。そして、彼は、「文明よりも大きくて、それを越えるようなもの」の存在をより重視している。それを例えて「言語や科学や芸術や倫理」などといっている。そして、それを「体系的な構成概念として意義」のあるものとし、「歴史現象としての文明の重要性」については、あまり価値を見いだそうとはしていなかった¹⁶⁾ようである。

④アルフレッド・クローバー

クローバーは明確な定義を示しているわけではないが、『様式と文明』の中で文明について次のように述べている¹⁷⁾という。

多くの人類学者たちと同様に、わたしも文明という語を文化という語とほとんど同義語として用いる。とにかく、わたしは区別を重視しないようにしている。文明という用語を進んだ文化とか、文字をもつ文化とか、おもに都市的な文化とかを意味するものとする広く行きわたった用語法がある。この用語法にわたしは異議は

唱えない。

クローバーの定義は、それほど厳密ではない。一般にいわれる「進んだ文化」「文字をもつ文化」「都市的な文化」ということである。このようにいつつつ、文明を相互に区別するのに役立つもの、として次のようにいつ¹⁸⁾。

文明ないし、高度な文化の諸言語の普及を含めたうえでの言語、宗教とか帝国とか政治的支配の形態、技術的發展とか富の蓄積の程度である。往々にしてこれらの基準は、諸文明の境界を画然と画定するものである。

また彼は、「文明は、人類内の一社会の所産がとる形態」¹⁹⁾という表現を使って、諸文明には目に見える形で見分けがつく様式があるという。それが言語、宗教、特に芸術だといいつ。

⑤アーノルド・トインビー

トインビーは、『図説歴史の研究』の中で、文明を次のように定義している²⁰⁾。

社会の営みを物質面で文明的レベルに保つには経済活動が必須であるが、いかに少数であれ人々の一部が、たんに食糧生産のみならず、他のいかなる経済活動——産業とか通商とかの——にも従事していない、そういう人々の存在する社会状態が文明なのである。それら非生産的専門家——職業軍人、行政家、そしてとりわけ僧侶がそうだろうが——は、今日私たちの知る限りの文明ではたいてい都市居住者であったことは確かである。

つまり「文明」とはその社会の中で各人が自給自足的な生活を送っているのではなく、その社会の中で分業体制が行われている、ということなのである。そのような社会が都市という空間であることは間違いないだろう。都市には、その成員の一部で直接生産に従事しない専門家という成員も存

在している。トインビーは、文明の定義の結論として、そういう成員が「仲良く一緒に暮らしてゆける社会状態」²¹⁾と端的に表現している。結局は人間が都市という空間で生活を開始したことによって、文明を作り出したということになるのである。だからこそ「文明」を「ひとつのまとまりとして理解可能な領域」²²⁾であるとも定義し、世界史研究として必要な単位と考えた。トインビーのその著書『歴史の研究』の中で「われわれが歴史と呼ぶものが“文明”社会における人間の歴史であるかぎり、文明のうちのあるものが“歴史のあけぼの”までさかのぼるのは当たり前である」²³⁾というのは、文明こそが世界史研究で必要な単位であることを説明している。

トインビーは、前述の比較文明学者たちと同様、西欧文明だけが文明であるというヨーロッパ中心史観、つまり「文明の単一性」について否定している。そして、複数の諸文明の「生誕、成長、挫折、解体」²⁴⁾による「文明の変動論」を展開し、先行文明とそれと同じ種の「子」文明の関係を述べている²⁵⁾。

⑥フィリップ・バグビー

バグビーは、『文化と歴史—文明の比較研究序説』(1958年)で、文明概念を次のように定義づけている²⁶⁾。

文明とは、いってみれば、都市にみいだされる種類の文化である。とすれば、諸文明とは、その特徴のなかに都市の建築物や居住者を含むような諸文化ということになる。

そして彼は都市を定義しながら、次のように説明している²⁷⁾。

都市は、多数（というよりも、もっと正確には大多数）のものが、食糧生産に従事していない居住者たちのすむ住居の集まりと定義することにしよう。1つの文明(civilization)とは、都市がみいだされるような1つの文化(cul-

ture)ということになる。

バグビーの定義も都市を前提にしたものである。この考え方はのちの比較文明学者にも影響している。しかし、彼は文明という用語を、「最大の示差的な実体を意味するために使うことにしよう」²⁸⁾と限定している。つまり、彼も文明を世界史研究の主要な単位であると考え、世界史研究をする上で比較しうる最大の対象と考えている。

⑦キャロル・クウィグリー

クウィグリーは、『文明の進歩』(“*The Evolution of Civilizations*”)の中で文明について、次のように述べている²⁹⁾。

文明と普通の生産社会の間に区別の線を引くことは容易ではない。そして、この時点でその線を引こうとするのは、我々の議論においてあまりに早すぎる。しかしながら、我々のなじみ深いほとんどの文明が、文字と都市生活という2つの要素を持っていることは明らかであろう。

クウィグリーは、人間の集合体を集団と社会に分けて考えている。その社会というカテゴリーをさらに寄生的社会、生産的社会とに分類し、生産的社会を単純生産社会と都市生活による文明とに分類³⁰⁾している。彼は、そのもっとも「早い段階における文明」を生産的社会、つまりは農耕と密接に結びついている社会と考え、麦や米、とうもろこし等食物による分類³¹⁾も行っている。

なお、彼は「文明の歴史的変動」³²⁾についても述べている。これはトインビーの「文明の変動」に少なからず影響を受けているものといえる。また、彼の文明分類(分類表)は、後述するハンチントンにも影響³³⁾を与えている。

⑧マシュー・メルコ

メルコは、トインビーの文章を引用しながら、文明について次のように述べている³⁴⁾。

(文明は) ある程度のまとまりをもったものだ。その部分は相互の関係や全体との関係で決定される。その文明がいくつかの国で構成されているなら、それら国家間の関係は文明の外の国との関係より密接になるだろう。その国家間ではたがいに競いあうことも多いだろうし、外交関係も頻繁になるだろう。経済的な相互依存を深めるだろうし、芸術や哲学の交流もさかんであろう。

メルコの考える文明は、トインビー、クウィグリーと類似している。メルコも、シュペンゲラー、ソローキン、クローバー、トインビー、クウィグリー、という一連の比較文明学の流れの中にあるからである。この流れの延長として、ハンチントンの文明に対する考え方がある、といえる。

⑨サミュエル・ハンチントン

ハンチントンは、『文明の衝突』で文明という概念を次のように定義づけている³⁵⁾。

文明と文化は、いずれも人びとの生活様式全般を言い、文明は文化を拡大したものである。いずれも「価値観、規範、社会制度、ある社会で何世代にもわたって最も重要視されてきた思考様式」を含んでいる。

文明を定義するあらゆる客観的な要素のなかで最も重要なのは通常、…宗教である。

ハンチントンは、「文明は最も範囲の広い文化的なまとまりである」と考え、「文明」を「人を文化的に分類する最上位の範疇」「人のもつ文化的アイデンティティの最も広いレベルを構成している」³⁶⁾ものと定義づけ、なおも次のように述べている³⁷⁾。

文明の輪郭を定めているのは、言語、歴史、宗教、生活習慣、社会制度のような共通した客観的な要素と、人々の主観的な自己認識の両方である。

文明は「われわれ」と呼べる最大の分類であって…

文明は文化的なまとまりであって、政治的なまとまりではない。

このような文明の定義は、これまで述べてきた伝統的な比較文明学者たちの考え方の影響を受け継いでいるものといえる。だから、明確にはなっていないが、都市生活が「文明的まとまり」の基盤にあることには違いがない。さらに彼は、トインビーの「文明の変動論」、クウィグリーの「文明の歴史の変動」等の影響を受け、「文明は持続するが発展する」ものであり、「栄えたり衰えたりするし、結合するかと思うと分裂する」、「やがて衰えて崩壊する」という、きわめて動的な存在と考えている³⁸⁾。

⑩伊東俊太郎

我が国の比較文明研究者である伊東俊太郎氏は、「文明と文化の関係にはいまだ定説というべきものはない」³⁹⁾と言いつつも、文明について次のように定義している⁴⁰⁾。

- (1) 文明とは気候や生態と深く結びつく地理的な広領域である。このことは、それぞれの文明の特徴をつくってゆく重要な条件である。つまり文明は風土と密接な関わりをもつ。
- (2) 文明とは歴史的な伝統である。それは比較的長い時間的なスパンをもち、そのなかの社会が変わってもなお持続する。
- (3) 文明とは洗練化された生活である。すなわち服装・料理・住居などの生活様式を意味するが、それが単なる生命の維持以上の洗練化を含む。
- (4) 文明とは高度な社会制度である。つまり、政治体制や法律制度や階層構造などの出現を含む。
- (5) 文明とは経済組織である。つまり、貨幣などを媒介とする交換のネットワークの形成

とそれによる財の積極的な蓄積である。

- (6) 文明とは集団的な技術である。建築、土木、水道、道路など、大規模な文明の装置をつくり出し支えるのは技術である。
- (7) 知的なもの、精神的なもの、美的なものも、それが制度化され組織化されれば文明である。たとえば科学や宗教や芸術のごときものも、組織をつくって制度化されれば文明としての機能をもつことはすでに述べた。
- (8) これらの7つの条件は、実のところ、ばらばらにあるのではない。したがって最後に、文明とはこれらのものが統合されている1つの構造である。

要するに彼の考えは、(1)風土、(2)伝統（歴史）、(3)生活様式、(4)社会制度、(5)経済組織、(6)技術様式、(7)知的・精神的・美的なもの（科学、宗教、芸術など）が(8)統合された文化的なまとまりである。だから、彼は、「文明は人間生活を営ませる“ハードウェア”」⁴¹⁾であると表現する。上述(1)から(8)の文明の定義から「ハードウェア」を推測すると、彼の文明の定義の中に明記されていない「都市」という存在を連想できる。なぜなら、上述(1)から(8)は、都市生活でなければ、成り立ちにくい存在であるからである。

以上で取り上げた比較文明学者たちの文明に対する定義（考え方）は、すべてハンチントン、あるいは伊東氏の理論によって集約されているように思える。そのことは、次節で述べる世界史構成がほぼ共通していることから推測することができる。ハンチントンと伊東氏に集約された定義を私なりに次のように定義してみる。

文明とは、都市生活の中で生み出された、ある種の共通の文化的なまとまり（価値観、規範、社会制度、特に宗教）による領域であり、文化的なまとまりとして区別（理解）可能な単位、のことである。

これはハンチントンや伊東氏の定義をもとに、各研究者の考えを最大公約数的にまとめたもので

ある。「文明」という単位の定義が個々の研究者によって微妙に異なる現状ではあるが、都市という存在なしには、各研究者もとらえていない。それを意識し、上述のように考えた。そして、次にこの定義を用いて、具体的な個々の「文明」というものを考えたいと思う。どの研究者があげる「文明」単位によって、世界史を語ることもっとも良いものなのか、取り上げる文明を考えたいと思う。

(3) 比較文明論における世界史構成

前述した各研究者たちは、各自の定義にもとづいて文明単位による世界史構成をしている。研究者によってばらつきがあるが、主要文明については、ある程度一致している。（8～23個）

それは次の表にまとめることができる。

(図表1)

	①ダニエル・スキー	②シュベングラー	③クローバー	④トインビー	⑤バグビーン	⑥クワイグリー	⑦メルコ	⑧ハンチントン	⑨伊東俊太郎
①	古セムなど	バビュロン	古代近東	シュメール・アッカド	バビロニア	メソポタミア	メソポタミア	メソポタミア	メソポタミア
②	エジプト	エジプト	エジプト	エジプト	エジプト	エジプト	エジプト	エジプト	エジプト
③	ヘブライ		ユダヤ	シリア		カナーン (ユダヤ)			シリア
④						ヒッタイト			
⑤	イラン		イラン						ペルシア
⑥				エーゲ		クレタ	クレタ	クレタ	エーゲ
⑦	ギリシア ローマ	ギリシア・ローマ	地中海	ギリシア	古典	古典	古代ギリシア・ローマ	古代ギリシア・ローマ	ギリシア・ローマ
⑧	ロシア●			ギリシア正教●		東方正教会●	ビザンティン (ロシア正教●)	ビザンティン (ロシア正教●)	ビザンツ (ロシア●)
⑨	新セム●	アラビア●	イスラム●	イスラム●	近東●	イスラム●	イスラム●	イスラム●	アラビア●
⑩	ゲルマン・ローマ●	西洋●	西洋●	西欧●	西欧●	西欧●	西欧●	西欧●	西欧●
⑪				インダス		インダス			
⑫	インド●	インド●	インド●	インド●	インド●	ヒンドゥー●	インド●	インド●	インド●
⑬						中華			
⑭	シナ●	中国●	中国●	シナ●	中国●	中国●	中国●	中国●	中国●
⑮			日本●			日本●	日本●	日本●	日本●
計	11	7	10	11	7	14	12	11	13
他	2	1	2	3	2	2	2	4	4

※横③ローキンは、文明分類を明確に行っていないので比較しない。
●は、現存している文明
伊東俊太郎については、1984年に発表した17の基本文明を表に入れた。

2 文明単位による教育内容とその展開

(1) 教育内容として取り上げるべき文明単位

各研究者が考えている世界史を構成する文明（図表1）について、1の(2)で定義づけた文明概

念（特に宗教）にもとづいて1つずつ検討した。

①メソポタミア（シュメール・アッカド、バビロニア他）文明

ハンムラビ法典に代表される同害復讐の原則、ギルガメッシュ物語に例えられる洪水伝説⁴²⁾など、特有の規範・社会制度、宗教的な価値観を共有しているので主要文明として取り上げる。

②エジプト文明

太陽神ラーを中心とする独特の多神教世界を有しているので主要文明として取り上げる。

③シリア（ヘブライ、ユダヤ、カナン）文明

ユダヤ教という独特の宗教がこの地で形成されたことから、特有な宗教的価値を有した「文化的なまとまり」を形成しているので主要文明として取り上げる。

④ヒッタイト文明

「可鍛鉄」の開発と実用化⁴³⁾による「文化的なまとまり」があると判断したクウィグリーのような考え方⁴⁴⁾もあるが、「宗教」という要素を文明定義として重視するならば、主要文明として取り上げることはできない。

⑤イラン（ペルシア）文明

メソポタミア文明を中心にした「文化的なまとまり」の中で存在している文明である。また、イラン文明の「ゾロアスター教」の宗教観は、シリア文明におけるユダヤ教とメソポタミア文明における宗教観の影響を受けたものである⁴⁵⁾ので、主要文明として取り上げないことにした。

⑥クレタ（エーゲ）文明

古代ギリシアのホメロスの神話で表現される男性中心の世界とは異なる宗教観を有している⁴⁶⁾ので主要文明として取り上げる。

⑦古代ギリシア・ローマ文明

十二神崇拜や規範、社会制度（都市共和制）が類似しているので同一の主要文明と判断し、主要文明として取り上げる。

⑧東方正教会文明

ビザンツ文明とロシア文明に分けて考える研究者もいるが、「正教会」という共通の宗教的価値観を有しているため、同一の文明と判断し、一つの主要文明として取り上げる。

⑨イスラム（近東、アラビア、新セム）文明

「イスラム教」という宗教にもとづいた特有な「文化的なまとまり」を形成しているので、主要文明として取り上げる。

⑩西欧（西洋、ゲルマン・ローマ）文明

「ローマ・カトリック教会」を中心にした「文化的なまとまり」があるので主要文明として取り上げる。

なお、「正教会」とは別な文明を形成していると判断した。それは、お互いの宗教的習慣の違いがある。また、同じキリスト教徒であっても、お互いが違いを認め合っている⁴⁷⁾ためである。

⑪インダス文明

インドという地域において、「ヒンドゥー教」が伝播する以前の宗教観を有していたので、主要文明として取り上げる。

⑫インド（ヒンドゥー）文明

「ヒンドゥー教」という宗教を基盤においた特有な社会が展開しているので主要文明として取り上げる。

⑬中華（古典中国）文明

現在の中国という地域において、「儒教」を価値観の中心にする以前の社会を中国文明とは別の主要文明として取り上げる。

⑭中国文明

「儒教」をはじめとする特有な価値観をもって
いる社会が展開しているのが主要文明として取り
上げる。

⑬日本文明

神道を中心とした特有な宗教観をもった社会が
展開しているのが主要文明として取り上げる。

以上のように検討し、地球の西半球に次の13の
主要文明が存在することとした。それは、メソポ
タミア、エジプト、シリア、クレタ、古代ギリシ
ア・ローマ、東方正教会、イスラム、西欧、イン
ダス、インド、古典中国、中国、日本である。

この13の文明を教科「世界史B」の単元構成案
という形で年間カリキュラムとし、文明単位によ
る（前近代の）内容構成を次の（図表2）のよう
にしてみた。

文明単位によって構想した世界史B単元構成試案
（図表2）

区分	大単元	中単元	時間	おもな教育内容項目	
前 近 代	文明の成立以前	文明の誕生 前夜	3	人類の進化、文化から文明の誕生、文明とは何か	
	古代の諸文明	メソポタミア文明		3	文明の混合と形成（シュメール人による都市文明と周辺民族との衝突）、文明の拡大（中核文明国の支配：古バビロニア）、文明の紛争期（ヒッタイトとカッシート）
		エジプト文明		3	文明の形成、文明の拡大（ピラミッド時代とテーベの時代、宗教観と死者の書、ヒエログリフ）、文明の矛盾とその後の帝国期（アメンホテプ4世の改革とその後のギリシア化）
		クレタ文明の世界と地中海		3	文明の形成（都市、宗教観と線文字）、文明の拡大（地中海各地への広がり）、文明の矛盾と影響
		インダス文明		3	文明の混合・形成・拡大（風土との兼ね合いも含める、都市生活、宗教観）、文明の紛争期（アリア人の侵入）、インド文明への影響
		古典中国文明		3	文明の混合・形成と拡大（宗法制、宗教観など）、文明の矛盾と紛争（群雄割拠、諸子百家と儒家）文明の帝国化（中華帝国の成立と儒教の役割、文字の統一）
	古代の諸文明から生まれた地中海世界での文明	シリア文明		3	文明の混合・形成（一神教の誕生と線文字の誕生）、文明の拡大（東地中海における諸民族の活動、ヘブライ国家の繁栄）、文明の矛盾・紛争（分裂・崩壊：ディアスポラ）
		ギリシア・ローマ文明		3	文明の混合・形成（神話からみる宗教観、ポリス成立）、文明の拡大・矛盾（アテネの民主制と発展）、文明の帝国化（ローマ帝国の帝国化）
	近 代	西欧文明		10	文明の混合期1（ローマ帝国内でのキリスト教伝道・国教化）、文明の混合期2（ローマ帝国の分裂とローマ帝国の滅亡）、文明の形成期1（ローマカトリック教会とフランク王国）、文明の形成期2（カトリック世界の拡大と聖俗権）、文明の形成期3（中世ヨーロッパ社会の展開）、文明の拡大期1（第2次民族移動とカトリック圏の拡大）、文明の拡大期2（異文明との衝突としてみる十字軍の遠征）、文明の矛盾・紛争期1（教皇権の衰退）、文明の矛盾・紛争期2（英仏からみる宗教と政治）、文明の矛盾・紛争期3（絶対主義化の芽生え）
			東方正教会文明		10

イスラム文明	10	文明の混合期1（イスラム教成立の背景）、文明の混合期2（イスラム教とは何か）、文明の形成期（イスラム帝国の成立）、文明の拡大期（アッバース朝の繁栄）、文明の矛盾・紛争期1（マムルーク勢力の増大とその後の分裂）、文明の矛盾・紛争期2（十字軍の遠征のイスラム側の原因）、文明の帝国期1（イスラム教の各地への拡大活動）、文明の帝国期2（オスマン帝国の成立と発展）、文明の帝国期3（スルタン・カリフ制による専制政治）、文明の帝国期4（オスマン帝国の最盛期）	
	インド文明	10	文明の混合期1（バラモンの世界観とヴェーダ時代）、文明の混合期2（新しい宗教の展開）、文明の形成期1（統一国家の成立と仏教）、文明の拡大期（インドの価値観の各地への伝播）、文明の矛盾・紛争期1（カースト制度批判とイスラム勢力の進出）、文明の帝国期1（ムガル帝国の成立）、文明の帝国期2（帝国内のヒンドゥー教とイスラム教）、文明の帝国期3（ムガル帝国の繁栄）、文明の帝国期4（ムガル帝国の衰退とマハラジャの台頭）、文明の帝国期5（西欧勢力の地方勢力との関係）
	中国文明	10	文明の混合期1（北方遊牧民の進出と魏晉南北朝時代）、文明の混合期2（中華思想の強化）、文明の混合期3（仏教の普及と道教の成立）、文明の形成期1（律令国家の成立：律令制度、科挙と儒教、均田制と税制、軍制の変化）、文明の形成期2（北方勢力・地方勢力の強大化）、文明の拡大期・矛盾期（宋代の外交と平和・繁栄）、文明の帝国期1（モンゴルの中国支配）、文明の帝国期2（明清時代の皇帝専制）、文明の帝国期3（世界貿易の中心である明後期から清前期）、文明の帝国期4（康康帝・雍正帝・乾隆帝の政治と貿易制限）
日本文明	3	文明の混合期（中国からの文化流入と独自の文化との融合）、文明の形成期（遣唐使廃止後の展開）、文明の拡大期（西欧文明との出会いと鎖国による文明の深まり）	
近代	5つの文明の世界帝国期	10	ルネサンスから世界大戦終結まで、アメリカ合衆国も含む
	東方正教会文明	10	ビュートル大帝から世界大戦終結まで
	イスラム文明	10	第2次ウィーン包圍の失敗（アラブ民族の独立）から大戦の終結まで
	インド文明	10	アウランゼーブ帝の死後からインド・パキスタンの独立まで
	中国文明	10	乾隆帝末期の通商問題から中華人民共和国樹立まで
	日本文明	3	幕末から第2次大戦終結まで
諸文明の現状	10	第2次世界大戦終結から冷戦の終結まで	
	(計)	140	

※本論文は、近代以前を中心に考察したもので、近代以降については、時間数ごとに項目の検討をしていない。

(2) 東方正教会文明を取り上げる理由

新学習指導要領にもとづいた平成15年度から実施される「世界史B」の教科書を比較すると、「地域世界」という枠組みによる構成では、特に「西欧文明」と「東方正教会文明」の違いが描かれていない。「ヨーロッパ」という一つの枠組みによるまとめ方であるがために同質な存在として、強調してしまっているからである。それは、次の新教科書の章立てや内容量からもいえることである⁴⁸⁾。

①山川出版社『詳説世界史』

第6章 ヨーロッパ世界の形成と発展

- 1 西ヨーロッパ世界の成立
- 2 東ヨーロッパ世界の成立
- 3 西ヨーロッパ中世世界の変容
- 4 西ヨーロッパの中世文化

第10章 ヨーロッパ主権国家体制の展開

- 1 重商主義と啓蒙専制主義

- 2 ヨーロッパ諸国の海外進出
- 3 17～18世紀のヨーロッパ文化

3 内陸アジアの動向と諸地域世界

②東京書籍『世界史 B』

- 第7章 新しい世界の誕生
 - 1 イスラム世界の誕生
 - 2 東ヨーロッパ世界の誕生
 - 3 西ヨーロッパ世界の誕生
- 第10章 ヨーロッパ中世世界の変容
 - 1 東ヨーロッパ世界の変容
 - 2 封建社会と都市
 - 3 カトリックと十字軍
 - 4 中世ヨーロッパ文化
 - 5 中世的世界の解体
 - 6 ルネサンス

③実教出版『世界史 B』

- 第8章 ヨーロッパ世界の形成と展開
 - 1 西ヨーロッパ世界の成立
 - 2 封建社会
 - 3 ローマ＝カトリック教会
 - 4 ビザンツ帝国と東ヨーロッパ
 - 5 十字軍
 - 6 封建社会の変質
 - 7 王権の伸長
 - 8 中世ヨーロッパの文化

④第一学習社『高等学校世界史 B』

- 第2章 諸地域世界の交流と再編
 - 1 イスラム世界の形成と拡大
 - 2 ヨーロッパ世界の形成と変動
 - 1 ヨーロッパ世界の形成
 - 2 西ヨーロッパ世界の形成
 - 3 西ヨーロッパ封建社会の成立
 - 4 カトリック教会と文化
 - 5 ビザンツ帝国の盛衰
 - 6 東ヨーロッパ世界の形成
 - 7 十字軍と都市の興隆
 - 8 王権の伸長
 - 9 新興勢力の登場と教皇権の衰退

実線をひいた部分が筆者の考える「東方正教会文明」に関する内容だけを記載しているところであり、破線部分が他の文明との関連の中で記載されているところである。4つの教科書ともに「東方正教会文明」（指導要領における、いわゆる「東ヨーロッパ世界」）は、ヨーロッパ世界という枠組みにおける“一地方”という考えでしかとらえられていないように思える。

それは山川出版社『詳説世界史』、実教出版『世界史 B』、第一学習社『高等学校世界史 B』の章立てを概観すると明らかである。3教科書については、「西欧文明」と「東方正教会文明」を同等で異なる関係として取り扱っていないのである。そのことは、例えば並列した関係にしたり、章立ての最後に補説のように取り上げたりするといった構成上の工夫がないことから判断できることである。

また、教科書の扱っている分量からもそのことはいえる。4つの教科書の扱う量は、次の図表3のようになっている。

平成15年度4月から採用可能な「世界史 B」新教科書における「東方正教会文明」の記述を比較する。

（図表3）

出版社	①山川出版		②東京書籍		③実教出版		④第一学習社	
書名	『詳説世界史』		『世界史 B』		『世界史 B』		『高等学校世界史 B』	
章名	「ヨーロッパ世界の形成と発展」		「ヨーロッパ中世世界の変容」		「ヨーロッパ世界の形成と展開」		「ヨーロッパ中世世界の変容」	
	「東方正教会文明」全体		「東方正教会文明」全体		「東方正教会文明」全体		「東方正教会文明」全体	
章立(節)	1	4	1	6	1	8	2	9
頁数	約4.5p	31p	約3p	24p	約3.5p	30p	4p	18p
	14.5%		12.5%		11.7%		22.0%	

※各出版社の代表的な教科書1冊を取り上げた。

新教科書の内容をみると、「東方正教会文明」の記述は非常に貧弱である。「東方正教会文明」の前半部分であるビザンツ帝国一千年の歴史の扱い方を例としてみても、そのことは明らかである。例えば、取り上げている皇帝人数を比較して

みても次のようである。

もっとも詳しいとされる山川出版社の『詳説世界史B』では、実質的に1名（ユスティニアヌス帝）の取り上げ方であり、西欧文明にからめた記述を含めて（ローマカトリック教会の成長の中でレオン3世が登場している）ようやく複数名を扱ったことになる、といった状態である。他の教科書においても、ほぼ同様である。東京書籍の『世界史B』では3名（ユスティニアヌス帝、ヘラクレイオス1世、レオン3世）、実教出版『世界史B』では2名（ユスティニアヌス帝、ヘラクレイオス1世）、第一学習社では2名（ユスティニアヌス帝、レオン3世）である。

「東方正教会文明」の後半部分であるロシアにおいては、ビザンツ帝国以上に貧弱である。どの教科書もあまりにも少ないページ数であるために、詳しい歴史的説明がなされず、事実名のみ記載で終わっていることが多い。そのため、教科書の内容を読むだけでは、誤解を生みやすい表現となっている場合もある。そのことについては、山川出版社の『詳説世界史』における「イヴァン3世」の記述をからもいえる。

大公イヴァン3世のときに東北ロシア統一、1480年にはモンゴル支配から脱した。彼は諸侯の力をおさえて強力な権力をにぎり、ビザンツ最後の皇帝の姪ソフィアと結婚してローマ帝国の後継者をもって自任し、はじめてツァーリ（皇帝）の称号をもちいた。また彼は農奴を土地にしばりつけて農奴制を強化し、専制君主制の基礎をかためてその孫イヴァン4世による中央集権化に道をひらいた。（P.131：「東ヨーロッパ世界の成立」）

この教科書は、他の教科書よりも比較的詳しい記述である。しかし、その記述を読むだけで、「東方正教会文明」と「西欧文明」の違いを生徒に認識させることは難しいように思える。新学習指導要領の意図である「ヨーロッパ」という「地域世界」という枠組みの同質性を伝えることは可

能であるが、その内部での異質性も伝えなければ、歴史の事実に関する誤解を与えることにもなる。

具体的に言うと、この記述からはローマ帝国という共通の祖を持つ「ヨーロッパ」という地域世界を読みとることは容易である。しかし、15世紀のイヴァン3世の治世に「農奴制の強化」を目的にした政策があったようにも読み取れてしまう。これは第一に取り扱う分量が少ないためであり、第二に同時代の西欧文明（この教科書では「西欧社会」）を説明した文章と同じ枠組み（節）内での記述であるということが、原因にあると考えられる。要するに、少ないロシア社会に対する記述分量が、他の西欧社会を説明した文章の中にあるため、読み手（この場合生徒）に他の西欧の社会と同質な歴史の変動をしているものと連想させてしまう可能性を持っているということである。

歴史の事実として、中世ロシアにおいて、農奴制は強化されてはいないという説が一般的である。農奴制の強化は近代になってからのことである⁴⁹⁾とされている。この15世紀当時においては、まだ農民は土地から離れることが可能な存在であり、西欧とは違った社会制度が運営されていたのである。そのことが、この記述だけでは読み取ることはできない。

教科書を概観しただけではあるが、「地域世界」という枠組み導入によって起こった歪みをこの部分だけからでも感じとれる。特に筆者は、「東方正教会文明」についての歪みが表面化している考えた。そして、その歪みを改善する方法として、前掲(1)の「文明単位によって構想した世界史B単元構成試案」(図表2)のように「文明」という枠組みによる学習内容で授業展開をする事例を考えてみた。特に前述した「東方正教会文明」(前近代部分)に絞り、授業展開例を次のように考えてみたのである。

(3) 東方正教会文明の内容構成と授業展開例

1, 単元「現存する6つの文明の成立—東方正教

「文明論」の目標と小単元構成

(1) 単元目標

ギリシア正教会を基盤にした文明社会が、どのように形成されたか、また他の文明社会とは異なる文明であることを理解する。

ビザンツ帝国の延長にロシア帝国があることについても理解し、その歴史の変遷を学ぶ中で、現在・現代との関係を認識する。

(2) 小単元構成

(図表 4)

時間	小単元名	学習の目標
1	ローマ文明としてのビザンツ帝国	ローマ帝国として存在しようとするビザンチン帝国の限界と変化せざるを得ない因果関係について理解し、新しい文明の起こりに関して感じ取ることができる。
2	アラブ人の侵入によって変化したビザンツ帝国(ローマ帝国からの変化)	文明の形成において、地理的要因、外的要因が関係していることを理解し、周辺民族との関係によって文明が成立していることに気づくことができる。
3	東方正教文明成立へむかう	宗教等の違いから、西欧文明との違いを理解できる。また、スラブ世界へのギリシア正教の伝播を学び、ロシアへの東方正教文明の広がりについて理解できる。
4	ビザンツ帝国の衰退	他文明との衝突との関係から帝国の衰退の過程を理解できる。
5	ロシア・モスクワ大公国の成長	モスクワ大公国の成長は、モンゴルの支配や他の文明の動きと密接に絡まっていることを理解し、現在のロシアのもとをつくったということを確認できる。
6	文明の中核国家の移動：ロシアへ	ビザンチン帝国からロシアへ文明の中核が移動する過程を理解し、それにはギリシア正教会とローマカトリック教会との問題が密接に絡んでいることがわかる。
7	ロシアのビザンツ帝国継承	イヴァン3世の政治を学ぶ中で、ビザンツ帝国の後継者としてのロシアが存在していることについて理解できる。
8	イヴァン雷帝による中央集権化とその後の「動乱」	イヴァン雷帝(4世)の政治を学び、その後の近代ロシア社会における問題を感じることができる。
9	ロマノフ朝の成立	西欧文明への傾斜という側面を学び、その中から西欧とは違う文明がロシアに存在していることを認識することができる。また、近代ロシア社会における問題を感じることができる。
10	絶対主義化の芽生え	西欧文明への傾斜という側面から東方正教文明という独自の文明が展開していることを認識し、その中で近代社会へ向かっているという点を理解できる。

2, 単元の内容構成

東方正教会文明について学ぶべき内容を次のように構成してみた。そして、それにもとづいた授業展開例を考えてみた。

東方教会文明(前近代部分)の教育内容構成(図表5)

教育内容項目	主な教育内容
ローマ文明としてのビザンツ帝国(東西分裂395～)	<ul style="list-style-type: none"> ローマ帝国の再興をめざしたユスティニアヌス帝(527-565) ※最後のローマ皇帝 「ローマ法大全」(529-533)からみるローマ文明との変化 「パン(食糧配給)とサーカス(競馬場・公共浴場)」による市民たちの政治の終焉

文明の形成期	アラブ人の侵入によって変化したビザンツ帝国(ローマ帝国からの変化)	<ul style="list-style-type: none"> ササン朝ペルシアとの戦いと暗黒時代への始まり(ヘラクレイオス帝：610-641) スラブ人の南下(6～7世紀)とアラブ人の侵入(7～8世紀) アラブ防衛とテマ制(レオン3世によるテマ連合国家：7～8世紀)の関係・皇帝専制国家への歩み、ローマ帝国との違い(テマ制と中央軍団、官僚制国家「皇帝の奴隷」、儀式の変化と全国英人コンテスト) ニケフォロス1世の「十大悪政」(スラブ植民、財政改革など：807～)と帝国の発展
	東方正教文明成立へむかう	<ul style="list-style-type: none"> ギリシア文化との関係(ギリシア人意識、公用語をギリシア語へ) ビザンツ人の意識 キリスト教世界の分割(聖像崇拜禁止：726、カールの戴冠：800、ローマ教皇の首位権の主張・フィリクエ問題：901)、イスラム世界との共存(アッバース朝の成立：750) スラブ世界への展開(コンスタンティノス5世のスラブ人・ブルガリア人への遠征、ニケフォロス1世のスラブ植民、ブルガリアとセルビアの正教化：9世紀、ロシアの正教化：キエフ公ウラジミール：10世紀、スラブ文字による聖書翻訳、ロシア教会のコンスタンティノープル総主教座からの自立)
	ビザンツ帝国の衰退	<ul style="list-style-type: none"> バシレオス2世による帝国の輝きと妹ナナのウラジミール公への降嫁(988) 貴族の成長による帝国の変遷(11世紀の領土失地、財政赤字からの脱却、ヴェネチアへの特権：アレクシオス1世) 十字軍を利用した失地回復(アレクシオス1世) 帝国の解体(スラブ系民族の独立)と第4回十字軍によるラテン帝国(1206：ギリシア人意識の強化) コンスタンティノープル奪回(1261)とミカエル8世による再建(ローマ教皇への教会合同の働きかけ、十字軍の終了へ)
	ロシア・モスクワ大公国の成長	<ul style="list-style-type: none"> キエフの衰退(1058)：分領公国化、地中海交易中心に変化 「タタールのくびき」(キプチャック・ハン国の支配：間接統治)とモスクワ大公国の勢力拡大(タタール税：ダーニの徴収権)
	文明の中核国家の移動：ロシアへ(1300' -1500')	<ul style="list-style-type: none"> ビザンツ帝国の滅亡(1453) キエフ府主教ビョートルがモスクワに移り住む→府主教フェオグノスト、モスクワに府主教を(1326) 「タタールのくびき」からの解放を模索(1380：クリコヴォの戦い：キプチャックの許しなく大公位を名乗る) ロシア正教会(ロシア人聖職者ヨナを府主教にし、コンスタンティノープル総主教から：1448)の独立(フィレンツェ公会議での教会合同に反対フィリクエ問題で妥協できない。：1438)のちのモスクワ総主教に設立へ影響(1589) タタール(ハン国の分裂：150)とモスクワ大公国との運転関係
	ロシアのビザンツ帝国継承	<ul style="list-style-type: none"> イヴァン3世による「ルーシの地の統一」(ノボゴロド併合：1478)、「タタールのくびき」の解放(1480) イヴァン3世とコンスタンティノス11世の姪ソフィアとの結婚(1472)：(大公=「ツァーリ」、モスクワを第3のローマ)、正教はモスクワ大公権の直接的な保護化、「双頭の鷲」を使用)
	イヴァン雷帝による中央集権化とその後の「動乱」	<ul style="list-style-type: none"> バルト海進出とシベリア(シベリア・ハン国の併合など)進出の模索(土族府の養成) 農奴制への傾斜とその価値観(農民を土地に縛る：1581-1582) 動乱の時代(大飢饉・農民反乱・偽皇帝事件・外国軍の侵入)
	ロマノフ朝の成立	<ul style="list-style-type: none"> ミハイル・ロマノフの政治(全国会議で選出、新軍創設：西欧人特校、スウェーデンとの相平) ロシア商人と外国商人(英蘭)の国内での競合
	絶対主義化の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> アレクセイの西欧文明への傾斜「外国人村」の設置：1652、ウクライナの併合によりラテン語の神学校がモスクワにも普及、全国会議や貴族会議の廃止と「御近会議」の創設 正教会の(ニコンの)改革(典礼の改訂、典礼書のギリシア原本など)→ツァーリは総主教に従属するという説で失脚(世俗権力の強化) フョードル帝の改革(門地制の廃止、税制改革：世帯税、オスマントルコとの対立開始(正教の保護))

※この論文の目的は、前近代部分の授業内容構成である。ビョートル大帝は、明らかに絶対君主であり、大帝の時代は絶対主義の時代といえる。それゆえにそれは近代社会と見え、ビョートル大帝以降の内容については省略した(文明の拡大期の後半以降のことである)。なお、ケイグリーの分類によると上記表の分類他に「文明の矛盾・紛争期」「文明の世界帝国期」が存在するが、それについてもここでは触れないことにした。

3, 授業展開例 1 :

小単元「東方正教会文明成立へむかう」

(本時 3 時間目/10)

(1) 学習の目標

宗教、言語等の違いから、西欧文明との違い

を理解できる。

また、スラブ世界へのギリシア正教会の伝播を学び、ロシアへの東方正教会文明の広がりについて理解できる。

(2) 授業展開

段階	発問・説明・指示	教授・学習活動	教育内容	資料
導入	1. 自分を何人（なにじん）と表現できるだろうか。	1. T: 発問する。住んでいる町内会名、市町村名、地域名、をあげさせる。 S: 考える。挙手する。答える。	1. 自分自身のアイデンティティーというものに置き換えてとらえる。	
	2. 住んでいるところが好きな人は挙手してください。	2. T: 発問する。人数確認 S: 考える。挙手する。	2. 町への愛着を確認する（都道府県という単位でも構わない）。	
	3. その中で10年以上住んでいる人は挙手してください。	3. T: 発問する。人数確認 S: 考える。挙手する。	3. 2を深める目的	
	4. 自分の住んでいる町には独特の言葉がありますか。	4. T: 発問する。 S: 考える。具体例を答える。	4. 言語と自分の所属する集団との仲間意識が密接にからんでいることに気づかせる。	
	5. 移り住んだ（転校等）者は、前の地域の言葉を話そうとするのか。	5. T: 発問する。（できれば転校生等に指名する。） S: 自分の体験を答える。	5. 人間は長く一カ所に住むとその地になじみ、その住人となってしまうことを意識させる。	
	6. それでは君達の先祖の場合はどうか？君達の先祖は、也田兵等に移住し、すでに100年を経過しているが、そういう人たちの子孫である君達も移住前の地域人（ジン）として、強く意識しているのか。また、移住前の言葉を話しているのか。	6. T: 発問する。（数名にその感想を問う。） S: 考える。	6. 同じ地域に住むことによって、言語や考え方が長い年月の中で同質なものへと形成され、それが郷土意識という共通性になることを認識する。	
	7. ローマ帝国の場合も、東西分裂して数百年たつてしまえば、東ローマ帝国領内の人々も、ローマ市の伝統よりも、その地に根ざられていた伝統的な文化と融合し、ローマ人としての意識の方が薄らいでくるとは、ないのか。まず、共通性のある言葉が生まれ、それを言う人々に特別な感情（親近感）、同質な考え（価値観）が生まれるのではないだろうか。この授業では、同じ古代ローマ帝国の後継者とされる東ローマ帝国と西欧が、異なる世界であるということを理解してもらいたいと思う。	7. T: 説明する。本時の授業を理解する。ワークシート配布。 S: 説明をきく。問題提起。	7. 古代ギリシア世界を想起し、ギリシアの流れをくむ、ビザンチン人としての意識が東ローマ帝国内で起こることを推測する。	⑧
	8. まず確認したいことは、この地では、一般に何語を話す人々が多く住んでいると考えられるのだろうか、ということ。また、宗教は何なのかということ。また、宗教は何なのかということ。	8. T: 掛け図を示し、発問する。いろいろ考えてもらうが、答えは語わない。 S: 答える。ギリシア語、アラビア語、スラブ系言語等を予想する。	8. ローマ帝国ではラテン語が公用語であったことも示し、ラテン語からギリシア語に公用語が変化していることに気づかせる。	①
	9. 東ローマ帝国の周辺にはどんな異なる宗教、習慣、言語をもつ国々があるのだろうか。	9. T: 10世紀の地図を配布し、発問する。（各地域と影響しながら東ローマ帝国も存在していることを説明する。） S: 答える。西側にオリエント諸国、北側にスラブ系の諸民族、諸国、西側にゲルマ	9. ローマ帝国を継承しながら、ギリシア文化の継承もし、オリエントの諸文明の影響も与えているであろうことを推測する。	②

	ン系諸国家（西欧）があることに気づく。西欧と同様にキリスト教の世界であることを確認する。 T: 「整理」で使用するためのヒントとして板書し、羅列しておく。			
	10. それでは、そういう東ローマ帝国と西欧世界を具体的なもので比較してみようと思う。	10. T: 具体的な比較の中で比べることを意識づける。 S: 意識する。		10. 比較の中で違いをみつけることができる準備をする。
	11. 次の同時代の絵（宗教画）をみて、違いを述べなさい。	11. T: 発問する。 S: 答える。 T: モザイクについては説明するが、その他については板書だけ。		11. モザイク画との違いに着目し、古代ギリシアの影響からモザイクの発展があったことを理解する。
	12. 次に、宗教に関する音楽を聞いて、違いを述べなさい。	12. T: 発問する。 S: 答える。		12. アカベラの聖歌とそうではない讃美歌の違いを知る。また、その印象を感じ取る。
	13. 同じキリスト教を信仰しているも、西欧と東ローマ帝国では絵画や音楽の面で違いがあることが感じられると思う。それでは、もっと宗教上で重要なものではどうなのだろうか。信仰の対象物はどうなのか。	13. T: 発問する。 S: 考える。教科書や資料集から考えようとする。		13. 前近代においては、芸術等も宗教との関係の中に存在していることを説明しながら、同じキリスト教社会と言っても大きな違いがあることを認識する。
	14. これがイコンというものです。西欧では信仰の対象は聖像のほうです。それと比較してみよう。	14. T: 実物を見せる。 S: 比較し考える。		14. イコンと聖像の違いから宗教観の違いを感じさせる。
	15. それから、キリスト教における重要な信仰物である十字架も西欧とは違うんです。	15. T: 資料の提示 S: 資料からその違いを知る。		15. 十字架というもつとも重要な信仰物にも違いがあることから、ローマ・カトリック教会と東方正教会は異なる宗教的存在であることを理解する。
展開	16. キリスト教の世界では、教皇と皇帝が対等の関係で結ばれていたはずである。（西欧文明の復興から）しかし、西ローマ帝国の復興をローマ教皇が行っている。これは何を意味することなのだろうか。つまり、教皇1名で皇帝2名ということになる。	16. T: 発問する。すでに学習済のことを思い出させる。 16. S: 問題意識をもつ。		16. すでに学習した「教皇と皇帝の関係」を復習し、それを意識しながら、歴史的な意味を考える。西ローマ帝国の復興（カールの戴冠）が、東ローマ帝国を独自の文明にする一要素になっていることを推測する。
	17. 君が東ローマ皇帝ならば、そういう状況を打開するためにどのようなことをしますか。	17. T: 発問する。 S: 推測する。答える。		17. キリスト教世界の分割、ローマ教皇との決別ということ意識する。そして、独自の世界を形成するということを推測する。それは、ギリシア的、オリエント的な影響を受けたものであることも推測する。
	18. 現実の歴史の中では、ローマ教皇との対立が起こっていきま。それは次のようなことであった。偶像崇拝禁止令（726）。西欧文明で学んだカールの戴冠（800）それにフィリオクエ問題（9世紀）などあります。	15. T: 偶像崇拝禁止令（モーゼの十戒による偶像を厳格に守ろうとするもの。特にこの法令に対してローマ・カトリック教会側が反発し、東ローマ教皇と対立した。）、カールの戴冠（東ローマの皇帝権とは別に西欧における皇帝権を作ったこと）、フィリオクエ問題（教義上の問題。精霊は子からも発するかどうかで対立した。）を説明する。 S: 説明を聞く。		15. ローマ・カトリック教会の悪徳とローマ・カトリック教会との対立の中で西欧文明と東方正教会文明の違いが生じたことを理解する。
	19. 東ローマ帝国は、前時間ですべてに皇帝専制国家へ歩み出していることを学んでいる。それに西欧世界とは違う宗教観を持つようにもなっていることもわかった。彼らは自らを「ローマ人」と考えるよりも、「ビザンツ人」「ギリシア人」と考えるようになったのである。	19. T: 説明する。前時の復習も絡めてまとめる。これ以後「ビザンツ帝国」と呼ぶことにすると補足する。 S: 説明を聞く。		19. 東ローマ帝国内部にすでに高度な官僚制度が存在していることを前時から思い出す。西欧文明（ローマカトリック教会）とは異なる宗教観がつけられ、異なる意識を持ち始めた文明社会が創造されていることを理解する。

現代世界理解を目的とする世界史の構想－「文明論」による授業構成－

発 展	20. このビザンツ帝国は、西欧世界以外の周辺世界とはどうつきあっていたのか、イスラム世界とはどうだったのか。	20T: 発問する。 S: 推測する。答える。	20. 前時から仮想敵国視しなければならぬことを理解し、アッパース朝成立によって、政治的中心地（バグダード）が移動したことによって、共存する道を選ぶことになったことを理解する。	②
	21. スラブ世界とはどうだったのか。	21, T: 発問する。 S: 推測する。答える。	21, 22. コンスタンティノス5世のスラブ人・ブルガリア人への遠征、ニケフォロス1世のスラブ植民地の政策後、スラブ世界に正教が広まり、9世紀にはブルガリアとセルビアが正教化し、10世紀にはロシアが正教化し、スラブ文字による聖書翻訳がされるまでになったことを理解する。正教の布教には防衛の意味もあることも理解する。	③
整 理	22. 遠征や植民が存在し、スラブ人の正教化が進んだ。	22, T: 地図プリントを配布し説明する。 S: 理解する。		
	23. 資料をみて、ギリシア正教会の広がりについて、分布図を作成する。また、西欧との文化的違いについて感じた点について書きなさい。	S: 資料をみて、作業をする。	23. ギリシア正教の分布図を製作をし、その広がりを実感する	④

資料①：現代用のユーラシア全図
 資料②：『世界史詳覧』浜島書店；世界史の資料集であればどの出版社でも構わない。
 資料③：『朝日百科世界の歴史』48, p.e-306のフランスベリー地方バリュオー・旧サン・ロラン教会祭壇の聖母子（12世紀）の拡大カラーコピー使用
 資料④：『図説世界の歴史』学研、p194のコンスタンティノープル、ハギア・ソフィア教会の聖母マリアを中心にしたモザイク画（12世紀）
 資料⑤：グレゴリオ聖歌（CD）、ロンドン・カルメン派修道院聖歌隊
 資料⑥：世界音楽紀行西アジア・東欧の旅聖ミナスの祝祭日の聖歌（CD）アテネ・ゾーフオス・ビギ教会
 資料⑦：高井寿雄『ギリシア正教入門』教文館、P59の写真拡大
 資料⑧：『図説世界の歴史世界歴史地図』学研、P51の上段の地図
 資料⑨：別紙ワークシート（設問1：文明の違いについての感想）と（設問2：資料⑦をみて行う白地図による作業）

展 開	5. 「ルーシ」の地で間接統治をしていた存在は何か。	5, T: 発問する。 S: 答える。	5. 教授・学習活動3のプリントを参考に答えることができる。「タタールのくびき」について理解する。	④
	6. 次の史料を読んでみよう。	6, T: 史料を配布し、指示。 S: 史料を読む、理解する。	6. 史料から「タタールのくびき」の開始が1240年から続いていることに注目する。	
発 展	7. 「ルーシ」を成長させ、「タタールのくびき」から解放するためには、武力以外で何が必要なのか。	7, T: 発問する。 S: 考える。答える。	7. 地方の権力者を統制するには何が必要なのかを考える。そしてその中で権威の必要性を感じる。	
	8. 最後のビザンツ皇帝との結びつきを強化した。	9, T: 説明する。 S: 意味合いを理解する。	8. イヴァン3世とコンスタンティノス11世の結婚（1472）の歴史的背景を理解する。イヴァン3世がビザンツ帝国の継承者であることを認識し、「双頭の鷲」が「ロシア」の紋章になった理由を理解する。大公が「ツァーリ」と称し、「モスクワを第三のローマ」といわれる理由も理解する。	
整 理	9. 「ルーシ」の宗教は、何だったのか。問題点は、タタール	9, T: 発問する。（確認） S: 答える。	9. 正教会であることを確認する。	
	10. ビザンツ皇帝と正教会はどういう関係だったのか。	10, T: 発問する。（確認） S: 答える。	10. 皇帝が教会を保護する立場にあることを理解する。	
整 理	11. 正教会がイヴァン3世（モスクワ大公国）の保護に入ったことを意味する。	11, T: 説明する。 S: 理解する。	11. このことがその後中央集権化に寄与することを推測する。	⑤
	12. 正教会を中心とした文明をこれから授業では「東方正教会文明」と名付けます。そのままとし、15世紀後半におけるその文明域と思われる所を色づけしよう。	12, T: プリント配布、説明。 S: 説明を聞く。作業をする。東方正教会文明の地理的範囲を知る。	12. 次時につなげる。	

資料⑩：「双頭の鷲」のイラスト（硬貨でも可）
 資料⑪：年表形式の複製型ワークシート
 資料⑫：掛け図を領土拡大によって変化するようにしたもの。（OHP等も可）
 資料⑬：『世界史総合図録』山川出版等の史料欄からの「ニコフ年代記」を使用。
 資料⑭：白地図型のワークシート

4, 授業展開例2:

小単元「ロシアのビザンツ帝国継承」

(本時7時間目/10)

(1) 学習の目標

イヴァン3世の政治を学ぶ中で、ビザンツ帝国の後継者としてロシアが存在していることについて理解できる。

(2) 授業展開

段階	発問・説明・指示	教授・学習活動	教育内容	資料
導	1. この紋章は「双頭の鷲」といいます。どこの国の紋章なんだろうか。	1, T: カードを掲示し、発問する。 S: 答える。	1, 2. ローマ帝国の紋章であることを理解し、ドイツでもこれが使用されていたことと考えあわせて、東西ローマ帝国の継承が近代までも続いていたことを連想させる。	①
	2. それでは、なぜ、この紋章が「ロシア」のものになったのか、考えてみよう。	2, T: 問題提起 S: 問題を理解する。		
	3. それまでの「ロシア」(この当時はルーシ)についての前時までの複製プリントをやってください。	3, T: プリントを配布し、発問する。 S: プリントを行い、前時までの確認をする。	3. 年表になっているロシアのプリントを行うことによって、時系列にして、理解する。	②
入	4. 「ルーシ」が「ロシア」と言われるようになったのは、モスクワ大公国の急激な成長があったからだとはいわれています。その重要な人物が、イヴァン3世であります。彼の政策をみると、紋章のことがわかってきます。	4, T: 掛け図を使用し、説明する。 S: 掛け図をみて、理解する。問題についても再認識する。	4. モスクワ大公国の領土の拡大がわかる。	③

おわりに

～今後の課題と授業実践にむけて～

本論文は、平成15年度から高等学校で始まる新学習指導要領に対する批判から、新たな世界史構成への試みである。

新学習指導要領では「地域世界」という枠組みを導入し、現在・現代を説明しようと考えたと思われる。しかし、この枠組みでは、冷戦後頻発している地域紛争を明確に説明する枠組みとは思えない。

本論文「はじめに」でも述べた通り、歴史教育の本来の目的は、過去をみて、現在・現代を理解するということである。歴史教育の本来の目的から外れて、授業を組み立てても何も意味がないのである。

最近の傾向では、「近代世界システム論（史的システム論）」⁵⁰⁾、あるいはそれに付随した「ネットワーク論」⁵¹⁾という理論を応用した授業が多くなってきている。「近代世界システム論」や

「ネットワーク論」は、同時代の国家、社会の仕組みを、物や情報等の流れによって説明しやすくしているという点では評価できる。特に近現代においては、わかりやすいと思うが、上述の歴史の目的である過去をみて、現在・現代を理解するという点にはつながらないように思える。

特に「近代世界システム論」を確立したウォーラステインの考えによると、すべての地域（文明論的に言うなら「文明」）が、15世紀から19世紀にかけて最終的に（西）ヨーロッパ的システムに包摂されてしまう⁵²⁾、というのである。この理論で歴史教育をするならば、世界史は（西）ヨーロッパ中心に動いている、という感覚に生徒を導きかねない。そして、（西）ヨーロッパが関係しない地域（文明）において発生した地域紛争や外交問題については、明確に答えを出すことができないのではないかと思う。つまりこの理論では、現在・現代の世界を適切に理解する、ということにはならないように思えるのである。

本論文「はじめに」で触れた歴史学者のE. H. カーは、「歴史は現代との対話である」⁵³⁾という有名な言葉を残している。現在・現代を理解するために、過去をみるという作業が行われなければ、歴史ではないのである。たしかに、同時代の国家、社会をグローバルに見るということは歴史において重要な部分ではあるが、それをするのが本来の歴史学、歴史教育ではない。あくまでも、それは2次的なものであると考えられる。

現代は国際化がより一層進んでいる時代である。上述のように国際化の進展の中で地域紛争も多発してきている。世界史が、現在・現代理解をする科目であることはすでに述べたとおりである。そうすると現在多発している（あるいは起こる可能性のある）地域紛争の原因の答えをも求められるのが、世界史という科目であるともいえよう。そこで筆者は、その答えを端的に示してくれる「文明論」による世界史こそが、歴史教育として、本来の目的にあった捉え方であると考えた。そして、本論文において、それに従った世界史構成を試みたのである。

本論文「1」で取り上げた「文明論者」クウィグリーの考えにもとづいて歴史を考えると、文明論にもとづく世界史の構成こそが理にかなっているということに気づくであろう。それは、人間の営みが歴史であるという前提上にある。つまり、歴史をみるということは、人間をみるということである。クウィグリーは、「人間の集合体の一形態に文明というものがある」⁵⁴⁾という。だから、人間の集合体である文明の営みが歴史でもあり、歴史をみるということは人間の集合体である文明をみることでもある。世界史から人間を除外し、語ることはできないはずである。それはつまり、文明を除外して、語るができないということでもある。

本来ならば、この各文明における近現代部分に関しての世界史構成も考察すべきであったが、前近代部分についてだけの構成で終わってしまった。今後の研究課題として残された。

授業内容構成は、授業実践してはじめて価値がある。「文明論」にもとづいた授業実践を北海道内では報告事例がない。それゆえに、本論文のような内容構成を筆者自身が、できるだけ早い機会に実践し、現場において、この構成案の有効性を実証していきたいと考えている。

[注]

- 1) 魚住忠久『共生の時代を拓く国際理解教育』p.43, 黎明書房, 2000年, 文部省『高等学校学種指導要領解説 地理歴史編』p.7, 実教出版, 1999年から考察
- 2) E.H. カー/清水幾太郎訳『歴史とは何か』p.78, 岩波新書, 1962年で「私たちは過去の光に照らして初めて私たちは現在をよく理解することが出来るもの」とあり, フェルナン・ブローデル/松本雅弘訳『文明の文法』1, p.20, みすず書房, 1996年で「現在の経済問題や社会問題, 世界の大きな文化衝突や文明の複数性について, 手ほどきしてやる必要不可欠だ」と述べている。
- 3) 佐伯真人・渋澤文隆・原田智仁編『改訂高等学校学習指導要領の展開地理歴史科編』, p.44, 明治図書, 2000年, 「文化圏のような固定的な空間概念ではなく, より柔軟な場の概念」
- 4) 文部省, 前掲書, p.43, 佐伯真人・渋澤文隆・原田智仁編, 同上書 p.44, 原田智仁氏によると「前近代の諸文化圏の学習に時間をとられてしまい, 近現代史の学習に充てる時間が

- 確保できない]
- 5) ハンチントン／鈴木主税訳『文明の衝突』, pp.22-50, 集英社, 1998年
 - 6) 堤彪「比較文明学の先駆者」, pp.53-54, (伊東俊太郎編『比較文明学を学ぶ人のために』世界思想社, 1997年所収)
 - 7) 同上論文, p.49
 - 8) 堤彪, 「比較文明学の先駆者」, p.55, (伊東俊太郎編, 前掲書, 所収)
 - 9) 同上論文, p.56
 - 10) 同上論文, p.55
 - 11) 中川久嗣「ヨーロッパ“近代”への危機意識の変化(2)－ニーチェとフーコー」, p.64, (神川正彦・川窪啓資編『比較文明学の理論と方法』講座比較文明1 朝倉書店, 1999)
 - 12) 堤彪, 前掲論文, pp.52-53
 - 13) 中川久嗣, 前掲論文, p.64
 - 14) サミュエル・ハンチントン／鈴木主税訳『文明の衝突と21世紀の日本』集英社新書, p.106, 集英社, 2000年
 - 15) アルフレッド・クローバー／堤彪, 山本証訳『様式と文明』 p.162, 創文社, 1983
 - 16) 同上書, pp.162-163.
 - 17) 同上書, p.140
 - 18) 同上書, p.146
 - 19) 同上書, p.74
 - 20) アーノルド・トインビー／桑原武夫他訳『図説歴史の研究』 p48, 学習研究社, 1975
 - 21) 川窪啓資, 前掲書, p.80, 「人類全体がすべてを包含する単一家族の成員として仲よく一緒に暮らしてゆける社会状態を創りだそうとする努力」
 - 22) アーノルド・トインビー／桑原武夫他訳, 前掲書, p50
 - 23) アーノルド・トインビー／長谷川松治訳, 『歴史の研究』1 サマヴェル縮刷版, p.84, 社会思想社, 1975
 - 24) 川窪啓資, 前掲書, pp.145-151, トインビーは『完訳歴史の研究』の第2巻から第13巻にかけて記述している。
 - 25) 同上書, p.144, 初代文明は独立文明で他文明と無関係の文明の場合と親文明(子文明を持つ)になる場合がある。その文明が初代文明の場合は、未開から文明になるが、第2代文明の場合は先行文明があるので事情が異なる(トインビー, 前掲書, p95)
 - 26) フィリップ・バグビー／山本新・堤彪訳『文化と歴史－文明の比較研究序説－』 p.169, 創文社, 1976
 - 27) 同上書, p.170
 - 28) 同上書, p.171
 - 29) Carrol Quigley, *The Evolution of Civilizations*, Indianapolis, 1961, p.76.
 - 30) *ibid.*, p.76, 単純生産社会には、たとえば紀元前2000年よりも前の西アジアの丘陵地帯に現れた「移動農耕」を実践した社会がある。定住、都市化の可能性がある以前の社会である。
 - 31) *ibid.*, p.78, トウモロコシを利用した集団には2つの文明(アンデス文明メソアメリカ文明)、米(早い段階ではキビと小麦)を利用した集団には少なくとも3つあり、中華文明、中国文明、日本文明があり、他に穀物文明がある。
 - 32) 川窪啓資『トインビーから比較文明へ』, p.560, 近代文芸社, なお, *The Evolution of Civilization* の5章で次の7段階があると述べている。①混合, ②懐胎, ③拡張, ④紛争期, ⑤世界帝国, ⑥衰退, ⑦外敵の侵略
 - 33) *ibid.*, p.83, サミュエル・ハンチントン／鈴木主税訳『文明の衝突』, p.66, 集英社, 1998
 - 34) サミュエル・ハンチントン, 同上書, p.55
 - 35) 同上書, pp.53-54
 - 36) 同上書, p.55
 - 37) 同上書, pp.55-56
 - 38) 同上書, p.57
 - 39) 伊東俊太郎, 前掲論文, p.8
 - 40) 同上論文, pp.12-13: 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会, 1985, p9
 - 41) 同上論文, p.8
 - 42) 古代バビロニアの叙事詩。永遠の生命を求めて放浪のはて来世をみるという話。西アジア各地の民族の宗教・文学に大きな影響を与えている。『旧約聖書』のノアの箱舟の原型ともいわれる。
 - 43) Carrol Quigley, *op.cit.*, p.83
 - 44) *ibid.*, p.76
 - 45) アーノルド・トインビー／桑原武夫他訳, 前掲書, p.147
 - 46) 浅香正 寺田和夫三浦一郎他訳『図説世界の歴史1 古代文明の盛衰』, p.188, 学習研究社, 1979年, コレット／エスタンエレヌ・ラポルト多田智満子監修／田辺希久子訳『ギリシアローマ神話ものがたり』, pp.32-33, 創元社, 1992年
 - 47) 高井寿雄『ギリシア正教入門』, p.61, 教文館, 1978年, お互いにクリスチャンとハリストイニアンを区別している。
 - 48) 佐藤次高・木村靖二・岸本美緒『詳説世界史B』, pp.5-8, 山川出版, 2002年検定済: 尾形勇・後藤明他『世界史B』, pp.2-4, 東京書籍, 2002年検定済: 鶴見尚弘・遅塚忠躬他『世界史B』, pp.3-4, 実務教育出版, 2002年検定: 向山宏他『高等学校世界史B』, pp.72-113, 第一学習社, 2002年検定済
 - 49) 和田春樹『世界各国史22ロシア史』, pp.99-104, 山川出版, 2002年, 井上浩一・栗生沢猛夫『世界の歴史ビザンツとスラヴ』 pp.437-440, 中央公論社, 1998年,
 - 50) I. ウォーラーステイン／川北稔訳『近代世界システム－農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』 I II, 岩波現代選書, 1981年
 - 51) 宮崎正勝「世界史教育における同時代史的歴史把握とネットワーク論」, 『筑波大学学校教育学部紀要 第15号』筑波大学, 1993年
 - 52) I. ウォーラーステイン／川北稔訳『史的システムとしての資本主義』, 岩波書店, 1997年, 世界の一体化, 世界的分業体制の中心としてのヨーロッパ(アメリカを含む)について説明
 - 53) E.H. カー／清水幾太郎訳, 前掲書, p.184にも掲載

54) Carrol Quigley, *op.cit.* pp. 67-84

授業展開」(平成14年度修士論文, 北海道教育
大学大学院社会科教育専修)の一部を再構成した
もので, 斎藤執筆の原稿を安藤が修正した.

[付記]

本稿は, 安藤豊が指導した斎藤修「現代世界理
解を目的とする世界史の構想—『文明論』による

(斎藤 修 北海道滝川西高等学校教諭)

(安藤 豊 旭川校教授)